

本書では、国境が消えゆく（原題：VANISHING BORDERS）時代に、U N E P、W T O など国際機関の活動との関連でいかに地球環境を保護していくかという構想が提示されています。

冒頭の章は「グローバリゼーションの光と影」と題され、第2次大戦以降の未曾有の経済成長が物資消費量の急激な増加（水・穀物は3倍、木材は2倍、水産物は5倍）をもたらした、その結果、世界経済は地球の生態系を「極限まで圧迫し始めた」状況を述べています。そして「エコロジカル・フットプリント」という概念（生産に必要な土地面積。輸入品は輸入元での面積を含む。）が紹介され、多くの国が「環境赤字」の状態にあるとしています。また、食料については農場から食卓にのぼるまでの平均距離（フードマイル）が着実に伸びており、英国ではこの20年間で50%余り増えているとの調査結果が引用されています（我が国について試算すれば、恐らくこの傾向は更に顕著なものと思われる）。

また、経済学の欠点として、自然の生態系が与えている重要なサービス（遺伝子資源、洪水防止、授粉、水資源かん養、土壌浸食防止等。ある生態学者、経済学者グループによる試算では世界で年間33兆ドル）を考慮に入れていないことを指摘しています。

このような危機的状況の中、著者は、「経済と政治の国際的構造の中に『環境保護』を組み込むべし」と主張します。W T O についても環境面からの修正を加えるべきとし、具体的には予防原則を明確に組み込むこと、多国間の環境協定がW T O 協定と対立する場合には前者を尊重すること等を提案しています。一方、環境面で有害な補助金削減の問題が取り上げられる可能性があるという面で、W T O に対する期待が表明されています。

もっとも、これらを進めて行くには政府ないし国際機関だけの取組では不十分であり、著者は、N G O とのパートナーシップの重要性を強調するとともに、環境保全のための「地球規模の盛り上がりが必要」として本書を閉じています。

（りえぞん No.3, 2001/9/18）

○ そんなにもあなたはレモンを待ってゐた

——高村光太郎「レモン哀歌」
（「智恵子抄」より）——

農林水産政策研究所がある北区西ヶ原から徒歩で15分ほど、都立染井霊園の一画に高村家の墓があります。赤芽垣に囲まれた墓石の側面には法名が彫り込まれていますが、光太郎と智恵子のそれは訪れた人がなぞるのか、やや判読しづらくなっています。

東京生まれの光太郎が、現在の福島県安達町出身の長沼智恵子と巡り会ったのは明治44（1911）年、3年後、32歳の光太郎は4歳年下の智恵子と結婚します。しかし、次第に智恵子は神経を病み、長い闘病生活の末に昭和13（1938）年、遂に帰らぬ人となりました。その最期を迎えつつある病床の智恵子に、光太郎はレモンを持って行きます。

冒頭のフレーズで始まるこの短い詩。手渡されたレモンを「がりりと噛んだ」智恵子は、その刹那、「トパアズいろの香気」と「数滴の天のものなるレモンの汁」により、にわかに正常な意識を取り戻します。長い闘病生活の間、何とか覚醒してほしいと願っていたのに、何故もっと早くレモンを持って来なかったのか、こんなにもあなたは待っていたのに……。この詩の淡々とした文字の間は、光太郎の烈しい悔恨と悲しみで満たされています。

自然の恵みである農林水産物、その中でも特に果実は、人間の精神や感性に直接訴える力を有しているようです。経済学的に言えば、果実という財は特殊な価値を有しており、その価値は希少性や利便性のみに依存するものではなく、かつ、市場で（貨幣単位のみで）十分に評価するには限界があるものかも知れません。

この詩に限らず、果実をモチーフにした珠玉のような文学小品は数多くあります。芥川は少女に汽車の窓から「暖かな日の色に染まった」蜜柑を投げさせ、太宰は虚勢を張って「珊瑚の首飾りのような」桜桃をむさぼり、梶井は丸善の画集の上に「カーンと冴えかへった黄金色に輝く爆弾」檸檬を置いて立ち去

ります。果実を始めとする農林水産物には、人の心を揺り動かす何か不思議な価値が、間違いなくあるのです。

さて、安達町には智恵子の生家(造り酒屋)が保存され、隣接する記念館には、病床での智恵子の楽しみであった紙の切絵が展示されています。多くは花や野菜など身近な素材を写したのですが、その色鮮やかさに驚かされます。2人も登った背後に続く小高い丘は記念公園として整備されています。今年の8月に訪れた際は低く雲が垂れ込めた日で、安達太良山も、その上に出ているはずの「ほんとの空」も、残念ながら望むことはできませんでした。

(りえぞん No.4, 2001/9/28)

○ レモン市場の経済学

—— G. Akerlof “The Market for ‘Lemons’”
(The Quarterly Journal of Economics,
1970.8) ——

野依良治・名大教授のノーベル化学賞受賞は久々の明るい話題です。「研究成果は論文で終わらせず社会で実用化させることが重要」との氏の言葉は、特に政策研究に携わる者には重みがあります。

同日、スティグリッツ・コロンビア大教授らと共にノーベル経済学賞を受賞したのが、今回紹介する論文の著者、アカロフ・カリフォルニア大教授です。

自由な市場取引により効用が最大化されるというのが経済学の命題です。無論、現実には独占や外部性の存在等によりこの命題が実現しないことが多いのですが、本論文は、仮に外部性等が存在しない完全競争市場においてもこの命題が必ずしも貫徹するわけではないことを、経済学の枠組みの中で最初に理論化したものです。

アカロフ教授は、米国における中古車市場に着目しました(レモンとは粗悪品の中古車を表す米国の俗語だそうです)。

市場には売り手と買い手が存在します。その中古車にこれまで乗っていた売り手は、当然ながら、その車の品質(良い車か悪い車か)を知っており、例えば良い車なら2,000ドル、悪い車なら1,000ドルでなら売ってもよいと考えているとします。一方、買い手の方は、的確にその品質を判断することが困難であるため、平均的な価格(良い車と悪い車が半々の場合は1,500ドル = $(2,000 + 1,000) / 2$)でしか買わないとします。

こうなると、売り手は1,500ドルより高い品質の良い車は市場に出さなくなり、それ以下の車だけが市場に流通するようになります。そうすると、今度は買い手の買っても良いとする平均価格も低下(例えば1,200ドル)し、そのために今度は1,200ドル以下の車しか市場に出回らなくなり、次第に市場には品質の悪い車(レモン)しか流通なくなります。このような過程を経て、結局、良い車の売り手は売ることができず、買い手は悪い車しか手に入れられなくなります。即ち、全くの競争市場であっても取引規模は縮小し社会全体の効用は低下するのです。

このような状況は、売り手と買い手の間で商品に関する情報に格差があることにより生じたものです。そしてこのような「情報の非対称性」が存在する場合に先に述べたようなメカニズムによって効用水準が低下してしまう現象を、「逆淘汰」「逆選択」と呼んでいます。

これらの考え方は、次第に保険等の分野でも重要性が認識されるようになり、現在は「情報の経済学」として経済学の重要な1分野を占め、多くの教科書でかなりのスペースが割かれています。現代経済学においては、完全競争 = 効用最大化との考え方は、理論的にもあまりに単純素朴に過ぎるのです。

最後に私事で恐縮ながら、20年ほど前、学生時代に使った教科書には本理論は紹介されておらず、今春、当研究所で開催している研修を聴講して初めて知ったような体たらくで、今や常識となっている理論も知らず経済・産業政策に携わってきたことを恥ずかしく感じた次第です。

(りえぞん No.5, 2001/10/12)